

白井義昭（著）  
『（増補版）シャーロット・ブロンテの世界  
——父権制からの脱却』

東京：彩流社、2007、2,800円、290頁。

田村真奈美



本書の初版は1992年に出版され広く注目を集めたが、しばらく前から絶版となっていた。評者も学生時代に本書を、興奮を覚えながら読んだ記憶があったので、今回再出版されたのを機に再び読み返してみた。増補版となっているのは、初版発行後に著者が発表した論文3本が加えられているためである。

初版についてはご存知の方も多いと思うが、副題が示す通り、シャーロット・ブロンテの作品において、父権制社会とそのなかでの女性の自立がいかにか描かれているかを読み解いたものである。白井氏は、かつて『ジェイン・エア』における〈火〉と〈空気〉の象徴を分析したデイヴィッド・ロッジの論文に感銘を受け、それがその後の氏の研究活動の原動力となったと初版あとがきに書いているが、本書における作品分析にもロッジのこの論文の影響が強く感じられる。

まず第1章で、シャーロット・ブロンテ自身の生涯を、とくに父親との関係に焦点を当てて概観し、作家自身が家長制社会のなかで、娘としての義務を果たしながら作家としての自立を目指したことを確認してから、第2章以降作品分析に入ってゆく。第2章で取り上げられるのは、初期作品の「アルビオンとマリナー」(1830)、「マイナ・ローリ」(1836-38)、「ヘンリ・ヘイスティングス」(1839)で、「ヘンリ・ヘイスティングス」のなかのエリザベスに例外が認められるものの、初期作品では男性が優位を占める父権制の社会が描かれ、女性は従属的な地位に甘んじていることが指摘される。

本書では象徴やイメージの分析が鍵となっているというのはすでに述べた

が、第3章以降ではそれがとくに聖書との関連で用いられる。これが最も成功しているのが第3章の『教授』の分析であろう。著者は、『教授』が形式（プロットの構成）においても内容においても旧約聖書の出エジプト記に倣って書かれていることを丹念に証明してゆく。主人公ウィリアム・クリムズワースの兄との確執、追われるように英国を出て渡ったブリュッセルでの誘惑、成功、迫害、そして英国人の母を持ち、英国を「約束の地」という妻フランシスを伴っての帰国、と『教授』はいわば「出ブリュッセル記」(p.95)と読むことができる。そして作者シャーロット・ブロンテは、最終的に約束の地にたどり着く「出エジプト記」に倣って書くことで、主人公に自らの夢を託したのだという。しかしながら、男性を主人公として、「父権制そのものである旧約聖書」(pp.95-96)の一部に倣って書かれた『教授』は、フランシスの描写を通じて女性の自立の問題に触れてはいるが、やはり父権制に基づく作品と結論づけられる。

第4章では、『ジェイン・エア』が旅と洗礼を主題とする小説として読み解かれる。この作品がゲーツヘッドに始まりファーンディーンに終わるヒロインの旅を描いているというのは明白だが、洗礼が主題というのはどういうことか。著者は登場人物の名前や地名などの固有名詞にも象徴的な意味を読み取っているが、ここではジェインの二人の従兄ジョン・リードとセント・ジョン・リヴァーズの名前が洗礼者ヨハネと関連していること、さらにジェインという名前がジョン（つまりヨハネ）の女性形であることなどから、ジェインが旅の途上で洗礼を受けながらクリスチャンとして成長し、最後には自らがロチェスターに洗礼を施すようになる物語として『ジェイン・エア』を読むのである。しかしながら、新約聖書に倣って書かれた『ジェイン・エア』も「父権制的な色彩の濃い作品」であり、ヒロインは自立を求めながら最終的には男性の庇護の下に置かれることになってしまうことから、「父権制の枠組みから脱却しえていない」(p.128)と論じられる。

第5章の『シャーリー』の分析では、シャーリー・キールダーとロバート・ムアという登場人物の名前に二面性を読み取り、そこから作品全体の解釈へとつなげてゆく手法がとられる。そして結末における二人のヒロインの結婚は、女性の自立を阻む父権制の確立のように見えるが、作品最後におかれた家政婦の発言と性別不明の語り手に注目すれば、『シャーリー』はむしろ「父権制に疑問を挟み、

ロバートとルイの家父長としての勝利を苦い思いで眺めている作品である」(p.153)とする。

『ヴィレット』を扱った第6章もヒロインの名前の分析から始まる。著者は『ヴィレット』を「語ること」と「語らないこと」という二重構造からなる小説とするが、その二重構造がすでにルーシー・スノウというヒロインの名前に明らかであるというのである。さらにルーシーの相手となるポール・エマニュエルにも二重構造性が指摘されるが、それにはポールと「使徒言行録」のパウロの類似を念頭に置く必要があり、彼らの類似点が詳細に説明される。そして最後の類似点、つまり二人とも最後の消息がはっきり語られず、しかも語られないにもかかわらず彼らの死が当然視されている、という点に「語ること」と「語らないこと」の二重構造が絡んでくるのである。「家父長」となるはずだったポールの死とルーシーの真の自立との関係を考えれば、『ヴィレット』において作者は二重構造を用いて「父権制から脱却して自立しようとする女性の自己主張を、巧妙にも貫徹しよう」(p.179)だ、という結論に至る議論は緻密で説得力がある。

増補部分はとくに章構成とはなっておらず、発表年が古いものから順に論文が3本載せられている。増補Ⅰは『ジェイン・エア』のエンディング」と題された論文で、解釈が分かれるこの小説のエンディングをシャーロット・ブロンテの他の三小説のエンディングとあわせて考察したものである。『ジェイン・エア』に限らずシャーロットのどの小説においても、主人公(たち)の成功や幸福が一方的に語られるわけではなく、彼らに対立する者も成功して幸福であることが最後に言及されている。こうして両者のバランスをとろうとする態度は、初期作品にはほとんど見られず、『教授』以降の作品を執筆する際の作者のリアリズム重視の決意と寛容な宗教観ゆえのものである、というのが著者の結論である。他の三作品についてはこの説で納得できるとしても、やはり『ジェイン・エア』の結末の問題はこれだけでは説明しきれないように評者には思える。セント・ジョン・リヴァーズを、『ヴィレット』のベック夫人や『教授』のペレ夫妻と同じように、単に「主人公と対立する者」と考えてよいのか。『ジェイン・エア』の結末を考えるにあたってはこの人物の解釈が鍵となるだけに、著者がセント・ジョンをどう読むのかが知りたいところである。

増補Ⅱも『ジェイン・エア』の結末と関係する論文であるが、今度はジェイン

の旅の終着地ファーンディーンについての考察である。著者はファーンディーン  
の解釈が1990年代を境に正反対といえるほど大きく変わったことに着目し、そ  
の原因を、物語の進行とともにファーンディーンの意味に変化が生じるためだ  
とする。さらに「羊歯の谷」という意味であるファーンディーンに作者がどん  
な意味を込めていたのかを、1830年代後半以降のイギリスにおける「羊歯狂い」  
(pteridomania)という現象の説明を通じて明らかにしており、著者の特徴であるテ  
クストの精緻な読み文化研究的な要素も加わった魅力的な論考となっている。

増補版の最後に置かれた「ヒロインはだれか——揺らぐベクトル」と題された  
論文では、『ヴィレット』のヒロイン変更の問題を『教授』との比較から考察し、『教  
授』を継承して筆を執り始めてしまったことが『ヴィレット』のヒロインの座が  
揺らぐことにつながったという結論に至る。『教授』と『ヴィレット』を比較す  
る際に、シャーロット・ブロンテが深い関心を持っていたという『ガリヴァー旅  
行記』を援用している点が著者のオリジナリティであろうが、評者にはその必然  
性がよくわからなかった。

以上全体を大急ぎで見渡してみたが、一冊の研究書として見ると、初版部分は  
「父権制からの脱却」に向かって一步一步進むような章構成になっていて、終章  
で完結をみており、増補部分はどうしても付け足しという観が否めない（非常に  
興味深い付け足しではあるが）。とはいえ、象徴やイメージの分析を丹念に  
積み重ねてテキスト全体を読み解こうとする著者の姿勢は増補部分でも貫かれて  
おり、その点では一貫性が感じられるのも確かである。また、初版部分でそれぞ  
れの作品分析につけられた父権制からの脱却という基準に照らした結論にはどう  
しても忝意性を感じてしまうのだが、増補部分の論文においてシャーロット・ブ  
ロンテの小説の結末の多義性が強調されていることで、はからずもその不満が解  
消されることになった。増補版においては、参考文献リストにも1992年以降出  
版の主だった研究書等が追加されているのもありがたいことである。初版を読ん  
だ人にも、まだ読んだことのない若い研究者や学生にも、ぜひ一読を勧めたい。

(豊橋技術科学大学准教授)